

## <枚方宿寸話>

### 1. 一里塚が片側に

2022年10月3日

堀家 啓男

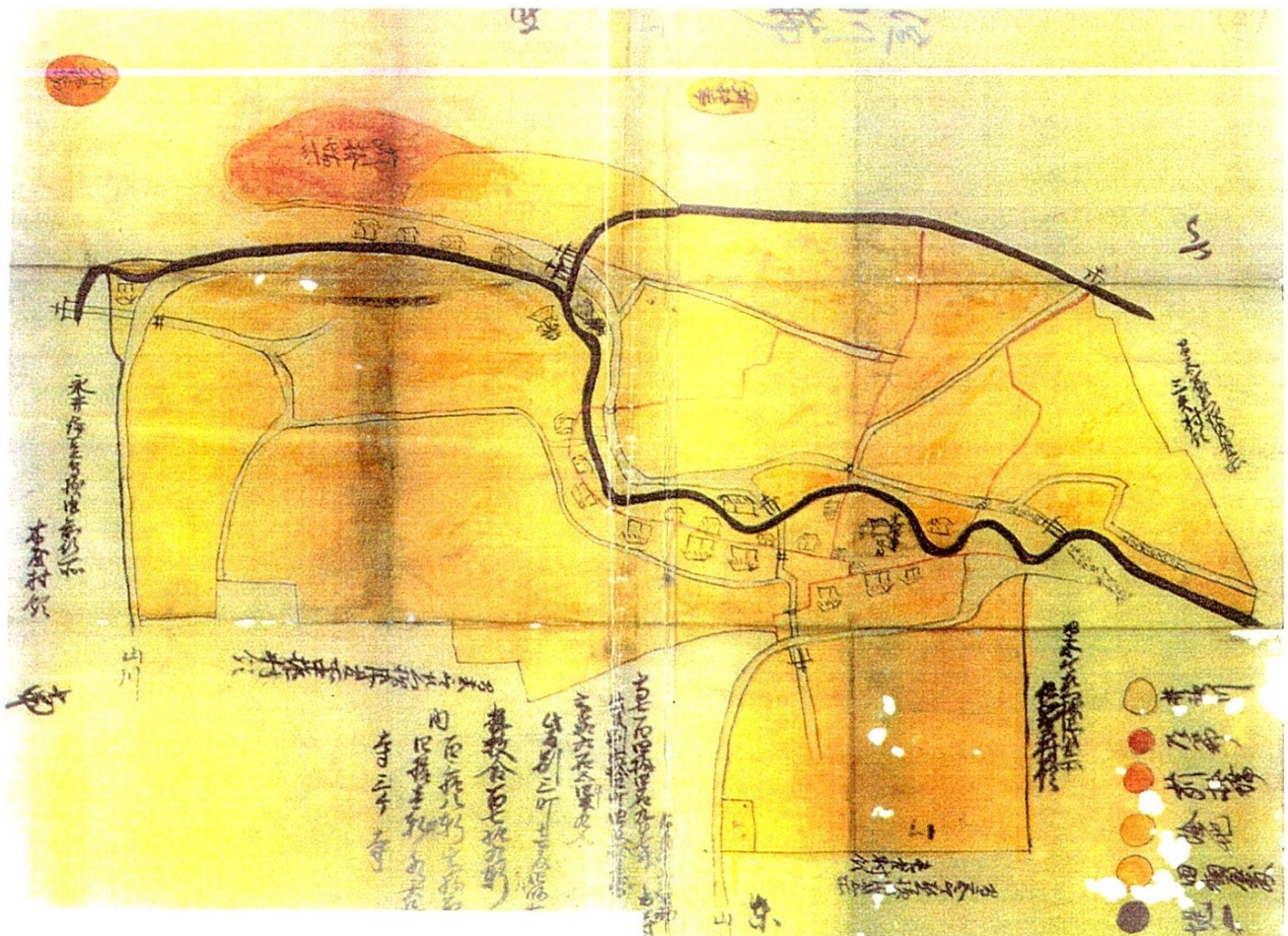
18世紀初め、枚方宿西見付からでた街道は淀川左岸の堤の上に付け替えられました。淀川上流の開発が進み、運ばれてきた土砂が堆積した左岸の堤外地を新田等に開発するようになり、新堤が公儀管理の「国役堤」として枚方宿三矢村堤丁から出口松ヶ鼻まで一本につながったのは元禄13年(1700)です。

それから10数年後の享保2年(1717)までには京街道(往還)筋はこの堤上に付け替えられたのです。

それまでは出口村内の秀吉が築いた旧文禄堤(古堤)の一部が街道筋として利用され、その古堤は光善寺より北側、つまり淀川との間にあり、(寺内町の特徴のひとつ)洪水等から寺を守るような位置にあったといえます。つまり秀吉の文禄堤は、すでにあった光善寺を守るために築かれていた土塁を再活用し整備したものであるということです。このことは出口の柿木家で発見された絵図等に古堤、新堤の経過が記載されていることから考えられるとのこと。

街道筋付け替えの結果、出口にあった一里塚は、旧道に残されたため、大坂に向かって左側一方に塚が偏る特異ものになってしまったのです。道中奉行作成の東海道分間延絵図(文化3年1806)や、京街道図巻(参考:市立枚方宿鍵屋資料館展示案内)にはその光景が描かれています。

(参考)市史年報第13号「享保期の新田開発と出口寺内町」馬部隆弘著



出口村絵図(柿木家文書)享保5年(1720年)の一部 右上に京街道が付け替えられた